

## 【児童臨床:サイコセラピストの家族との関わり】 (1968)

マーサ・ハリス(Martha Harris)

われわれ子どもを対象とするセラピストは、概して成人を対象とするセラピストよりもいっそう患者の家族の協力を依存せざるを得ないといえましょう。もしも患者が幼い子どもである場合、普通は母親が、時には父親が、毎回子どもをセッションに連れてこなくてはなりませんわけですし。年上の子どももしくは青年期の子どもですらも、時として治療が困難な状況に差し掛かった折、その治療の継続のためには両親からのサポートと励ましが必要とされるのであります。

この論文では、児童サイコセラピスト及び分析家としてクリニックやら個人開業(private practice)の場で児童を対象として臨床に携わってまいりました私自身の考えますことを幾らか披露してみたいと考えます。これまで何年かの間私は【タヴィストック・クリニック】の児童及び家族部門(the Department for Children and Parents)で職責を果たしてまいりました。このクリニックでは、アプローチのさまざまに異なる人々が集まっております。ですからこれから述べます私の児童及び家族との臨床についての回想は、私個人の経験であり、またそうした実践に由来するものとして捉えられねばなりません。つまり必ずしもそれがここにおいでの方々の見解を表しているとも言えないわけであります。

この部門では大概のところ、子どもの治療は週1回のセッション、もしくは2回、もしくはそれ以上週5回まで、児童サイコセラピストもしくは精神科医によって面接が営まれます。その一方で母親は精神科ソーシャル・ワーカーもしくはソーシャル・ケースワーカーによって面談を受けることになっております。結構な数の症例において父親もまた定期的にこうした治療に参加しております。そして時たま家族の他のメンバーにも治療が施される場合もあります。幾つかの症例では、年上の子どもたちについてであります。両親のどちらも得てして定期的な面談を受けることはないという場合もあり、それは、例えば彼らが他の場所で分析なり、もしくはグループでの治療を受けているといった理由も考えられましょう。

### 子どもの治療を始める準備段階としての親とのインタビュー

非医療的 non-medical 児童サイコセラピストとして、私は子どもが精神科医の面談を受け、さらには心理テストを受けるまでは会うことは致しません。まずはそうした経緯において、子どもにどのような問題があるのかが両親と共に検討され、そして家族の中でその子がどのような役割をなしているのか、両親のどちらもがそして子どももまた治療を求める動機づけの是非が、そして協調性といった彼らの能力についてもまたそれなりの理解が得られるわけであります。これは大概のところ、まずは精神科医および精神科ソーシャル・ワーカーが両親と面談し、さらにはそこにサイコロジストおよび児童サイコセラピストも列席して討議され、査定結果が出されるわけであります。そこでもし定期的な分析治療がおそらく

適切だろうと判断され、私が子どもを治療に引き受けることに同意するとしますと、私からご両親に予備面談を申し出ることになります。彼らのごく自然に、子どもの治療に取り組んでくれる人物に信頼を寄せることができたらいいと願っておいででしょうし、それでぜひとも私に会いたいと思ってくれているものと考えます。私の立場としましては、両親に直接会ってその印象を得、そして彼ら相互の交流なり、それと私への態度なども観察し、彼らの口から子どもの問題性について、またその子との彼らの関係性についてさまざまにお話いただきますことから実に多くを学べるものと思っております。こうしたインタビューでは、両親の病理を深く追求することは致しません。もしくは解釈を試みるといったことも致しません。私は助言をすることも慎重であります。時にはその両親のどちらかがもしくはどちらもが、すでにソーシャルワーカーもしくは精神科医と面談治療を始めているということが考えられますし。こうした状況では私の為すべきことの一つは、子どもが両親の眼からどう見られているのかを出来るだけ鮮明な印象を得ることであり、両親が、個人としてもそして互いの関係性においても、彼らが子どもにとってどんな具合であろうかといったことについて幾らか感触を得ることなのであります。

こうした予備面談には予め計画立てた筋書きといったものはありません。ただ子どもが私と一緒に治療に臨むにあたって、それがどのような性質のものか、両親が尋ねたいことがあればかような質問に対しても、私はごく単純に事実でもってお応えするように致します。勿論のこと、こうしたことは普通すでに精神科医もしくはソーシャル・ワーカーによって説明されているはずであります。しかしかなりしばしばよく出くわすことなのですが、彼らはそれについてもっと尋ねてみたい、もしくは同じ質問でも実際に治療に携わる当人から新しい何かを答えてもらいたいと望むようであります。それで私はこんなふうに説明いたします。子どもはセッションにやって来て、話すことをしますし、もしくは遊具で遊ぶということをもするでしょう。それは幼い子どもは言葉だけでは自分をうまく表現できないからだということを…。そして子どもの遊びを観察することで、私は徐々にその彼の成長を妨げている葛藤やら不安感の幾らかを徐々に理解できるようになることが期待されてゆくということを…。葛藤そして不安感は、その大概の部分は無意識 *unaware* なのであります。彼にそうしたことを話すことで、治療場面で私との関わりにおいてそれらが徐々に解明されてゆくわけではありますが、それらについてよりよく理解でき、そして日常生活においてそれにさほど影響されないようになってゆくよう彼を援助できるのではないかと期待されるということでもあります。セラピストは子どもにとって極めて重要な人物になるということ、それは献身 *devotion* ならびに憎悪 *hatred* の対象といったことですが、それをも私は説明いたします。それは子どもに依りますし、そして治療の段階にも依るわけでありまして、その折々に情緒がいちじるしく顕著となることでありましょう。子どもはセラピストに会えるのは治療場面に限り、自分に耳を傾け、理解しようと努めてくれて、かつ理解を伝えてくれる人としていてくれることを承知していますので、彼は得てして他の状況よりもっと暴力的にそしてもっと自由気儘に自己を表出することになるといってもいいでしょう。

治療において彼自身のあらゆる側面を、それがどんなに受容され得ないものであったとしても、表出できるようになることは彼にとって基本的に重要なことでもあります。そうした‘受け入れ難い己の部分’に対処し取り組んでゆくためにこそ理解と援助が与えられているわけだからです。そこでセラピストと

一緒のときに自分の心の内で何が起きているのかは‘極秘 confidential’とされていると感じることが彼にとって殊更に重要となります。従って、私は、治療セッションのなかでどんなことが起きているのかということをお二人と一緒に話し合うということは出来ないと彼らに告げることに致します。しかしながら、もしも彼らが私に会うために時間を予約したいと願うなら、もしくは電話でならいかなるときにも、私はそれに喜んでお応えすることに致しますということを伝えます。それから普通私は、こどもがセッションに来たくないときが訪れることもあり、彼が治療を退屈だとか無益だとか言ってけなすときもあるということをも指摘します。そういうときには私は、両親からのサポートを大いに頼りにすることになりましょう。彼がセッションに出掛けてくることを嫌い、治療状況のせいになっているものが何であるのかということをお二人自ら理解するためには定期的に通ってこなくてはならないのですから。。

### 児童臨床において両親との持続する関係性について

もしもそれがクリニックでの症例で、母親がソーシャル・ワーカーもしくはケース・ワーカーによって定期的に面接を受けているといった場合、私は実際のところ最初のインタビュー以降、両親との直接的な接触を持つことは滅多にありません。母親は子どもとの、それから他の家族についてもですが、それらの関係性について抱くところの不安感を話し合う機会をワーカーと持っているわけですし、もし子どもについて私に何か伝えたい事柄があれば、どのようなメッセージでもワーカーに託けることができるわけがあります。そうした状況ですと、治療が開始された後に私が彼らとのインタビューを申し出るといったことはいニシヤティブを取ることはごく稀であります。家族が何らかの危機に直面したとき、それが子どもによる行為化 (acting out) のせいだったり、もしくは他の理由であっても、ケース・ワーカーから一応両親から得た状況説明を耳にしておくことで注意を喚起されることをとても有意義と私は考えております。しかし私は滅多なことでは、直接的に彼らに助言をしたり、もしくは家庭環境を改めさせたりといったことは必要ないというふうに思っております。私は、両親が出来るだけ状況に対して良き理解を得て、それに従って行動するように援助してあげられるように事態をケース・ワーカーに一任します。もしそれがクリニックの症例ではない場合、そして両親に面接する人が誰もいない場合ですと、私は必要に応じて両親をサポートするといった役割を敢えて担うこともあります。

両親と会うことが当を得ている、賢明であるといった場合にも私は通常子どもにその旨を話すとか、もしくは彼の許可をわざわざ取ることは致しません。彼が青年期の子どもであったとしてもです。そして私は大概両親もまた彼にそのことを言わないようにするのがいいと考えます。それで目下進行中の転移関係にはなはだしく差し障りが生じないためであります。しかしながら、両親が誰しも思慮深く慎重を期するということもありませんから、子どものセッションにおいて、両親と私との間でミーティングがあるのを感じているかどうか、何らかの兆候があるかどうかを見定めます。もし彼がミーティングについて気づいているといったふうにはっきり覗かれる場合、私は事実を認め、そして彼のそれへの反応を理解し、そして解釈を試みるでしょう。時として、青年期の子どもの場合には特に、両親とセラピストがミーティング

するといった事態に遭遇し、治療の行く末が危くなるということがあります。こうしたことを両親に指摘することもありましょうし、それで彼らのワーカーと一緒にそうした差し迫った困難を話し合うことを私は強くお勧めすることになりましょう。もしくは彼らにワーカーがいない場合ですと、同僚の誰かをお勧めすることにもなります。それから症例に対して医学的な責任を取る立場に立つと考えられるのは、当然ながら精神科医ということになりましょう。

## 両親と比較してセラピストの役割とは何かについての個人的見解

ここで念のため、子どもと関わるうえでの私の役割を両親のそれと比較してみることは有益かと思われれます。私は週一回、もしくは最大でも週5回子どもに会っていることになりましょけれども、彼の日々の暮らしに親的な責任を担うわけでは決してありません。経験を増すにつれ、それは多くの他のセラピストにしてもそうでしょうが、私は助言を与えることにますます控え目になってきたといえます。数年前のことでしたか、私は或る一人の男児のセラピイをしておりました。彼はプレパラトリイ・スクール preparatory school からかなり難易度の高い学力指導をすることで定評のあるパブリック・スクール public school へと進学することになっていました。彼は確かに知能の高い子どもではありましたが、この学校で期待される場所の学業成績を収められるものかどうか私には疑問に思われました。彼は家庭内では極めて自由気儘で我が儘放題の生活が許されており、他の子どもたちとの交遊には慣れていませんでしたし。それに雇われている家政婦に対しては横暴で、ついには‘無能’だとして職から追放してしまうことがよくあったわけです。私は両親に対して私の疑念を訴えたわけですが、彼らは聞く耳を持たず、方針は撤回されませんでした。この有名進学校に子弟を送ることは彼ら一族の伝統であったからです。それでこの子はそこへ送られたのであります。その最初の2学期間、彼は随分と適応に難儀したもようです。しかしこの間セラピイは継続されていたわけですが、やがて学校の先生方との間での軋轢が、それから学習面でも困難が明るみになり、それで両親の目にも家庭内でのこの子どもの躰が改めて見直される必要があるということがはっきりしてまいりました。そしてこのことが、それにどんなライヴアルも我慢できないといった、貪欲でかつ情け容赦のない万能感についての洞察力がセラピイに於いて彼のなかに育まれたせいもあり、結果的に学校への適応は随分と落ち着いてきたわけなのであります。この症例を私がここで挙げましたのは、当初私は彼をもっと要求のそれほど高くない学校を選択するよう両親を説得できなかつたということでもどくしくじつと感じていたわけなのですが、しかしながら案外にも外的状況がいつそう要求の高いものとなったからこそそこで彼の問題性は明るみになり、それでむしろサイコセラピイにおいてもそれらを徹底操作することが可能になったという具合に事が展開したということをお話したかったからです。

両親が子どものための治療を求める場合、それがクリニックなりもしくは個人開業している場であってもですが、充分事前に情報を与えられていたとしても、彼らは罰されるといった無意識の恐怖及び深い罪悪感を抱いて来所するものと考えられます。彼らがそのようなことにたとえ気づいていなくないと

しても、それはごく部分的に意識的なもので、かつ現実即してでありましょう。どの両親のなかにも‘小さな女の子’そして‘小さな男の子’というのが依然として存在しているのであって、彼らは決して真つ当な母親もしくは父親にはなれないといったことを内心深く確信しているものなのであります。そして事態がおもしろくなくなったり、何かしらまずいことが起きた場合、この母親のなかの‘幼い女の子’はそれが発覚したと思うわけです。そしてセラピストに彼女自身の内なる母親の超自我的像を投影しますから、それで彼女は咎められ、不遜でけしからぬ不手際ゆえに子どもを取り上げられてしまうといったふうに思うわけであります。セラピストとしてのわれわれは、われわれ自身の分析をとおして、母親と張り合い、そして無意識裏に子どもを奪い去ってしまいたいと密かに願っているかも知れないといった、そうした動機がこころの内に僅かながらでもありはしないかをよくよく吟味し、それについて十分な洞察を得ることが重要であります。もしもわれわれが親の役割として子どもの日々の暮らしを切り盛りする責任があるといったことを尊重するとしたら、彼らがどのような困難な状況にあらうと彼らにしかそれは担えないものなので、われわれは、治療が子どもの所有を巡ってのバトルには決してならないということをわれわれの態度でもって保証してあげることができましょう。そうしますと、多くの両親が子どもとセラピストが陰で結託し彼らを批判するなりもしくは憐れんだりしているかも知れないといったパラノイ的な恐怖を抱くことがあるわけですが、われわれはどうかそれを鎮めることができるといえましょう。その一方で、セラピストは、子どもの両親への批判をそのままそっくりもつともな事として見做し、もしくはその無意識の態度でもって両親の恐れを強め、それで治療が打ち切りになったりすることもあります。もしくはその水面下では敵意を潜在させながらも不健全な依存性を増してゆくもありましょうが、それは危機的な状況下で分析的作業を危うくしかねないわけであります。

詰まりのところ、あまりに親たちに対して無意識的な敵愾心が強い場合、セラピストは彼らに過剰に依存的になりがちで、そして彼らの賛同を得ようと躍起になることになり、子どもはそれを逸早く察するでしょうから、子どもとの治療に支障を来すことになりかねないわけであります。もしもセラピストが子どもにあまりにも強く同一化し、それで無意識に親たちをその子のすべてに問題について内心咎め立てしているとすれば、両親の訴える苦情なり、治療中に彼ら自身の罪悪感を彼女に投影するといったどのような企てに対しても、痛く傷つきやすいことになりかねません。彼女はそこで完全に打ちのめされ、意気消沈し、そしてセラピイが後退したことに、もしくは子ども側にアクティング・アウトが続いたときにも、すべてが自分の責任として感じてしまうのであります。それら込み入った諸々の事実を掌握し、彼との治療の中でそれらについて彼と一緒に取り組んでゆくといった彼女の能力はそこで深刻に阻まれることになりましょう。

私の経験を述べますならば、子どもを治療するセラピストとしては転移関係をできるだけ完璧に分析すること、それが何よりも一番両親を手助けすることとなり、それでしばしば彼らのなかに子どもに対していっそう好ましい態度が芽ばえてゆくといったことをもますます確信するようになってまいりました(Bick, 1962; Boston, 1967)。外部からの干渉を防御したところで、治療的フレームワークを極力定期的かつ信頼できるものとして維持するよう努めることで、私としてはどうか受容性 receptivity を

堅持しつつ機能できるものと考えております。そうであればこそ子どもをして、その彼のパーソナリティーの相容れない、分裂された側面 the alien split-off aspects を、またそれらによって生じるところの葛藤及び不安感もなのでありますが、詰まりのところ彼の関係性を損ね、そして家族が提供できるものが何であれ、それらを精一杯活用することから彼を妨げていると考えられる、それら諸々のものをセラピストへの転移 transference に収斂させるといったことが可能になるわけでありませう。

### 症例ウォルター；子どもの不安感がセラピストへと転移されたときに起きた最初の進展の兆し

幼い子どもたちは、こうした不安感をセラピイの場に於いて実にすばやくセラピストに転移させ表出させることを致します。それでセラピストによって理解されたといった感じを得、取り敢えず最初にかなりの安堵が与えられ、それでコンティンされましようから、その結果として家庭内での問題が緩和され、そのことで両親は治療に対して十分な信頼を抱くことになり、そしてその後には何かしら厄介な事態が起きたとしても落ち着いて静観できることになりましよう。因みにそうした事態とは、こどもが自らの‘再統合’に向け、苦痛に満ちた洞察及び受け入れ難い己自身の部分に耐え忍び、それを生き通すための責任を引き受けることに抵抗しているとき、家庭内でそうした葛藤を彼が行為化 acts out するといったような場合であります。

切迫した不安が嵩じた状態において、例えば夜驚とか、過剰なしがみつきの、摂食恐怖症もしくは学校恐怖症といったような兆候が表出されたときなどですが、私の経験では、子どもは実の両親そして日々の馴染んだ環境がすっかり消え失せてしまい、悪夢的な世界となり、両親もおとぎ話のなかの魔女とか魔法使いに変貌するといったことをひどく恐れていることがしばしば覗われます。ここで簡単にそうした事例について例証を試みることにいたしましよう。そこに於いてこれら子どもの不安感がセラピスト及び治療状況に徐々に転移されてゆくといった分析的技法が示唆されておりますわけですが、そのようにして子どもはそれらに直面することを援助されてゆくのであります。

ウォルターは10歳の男児で、深刻な問題を抱えており、クリニックに紹介されてきました。その主訴は様々な、それもますますひどくなる一方の恐怖感を抱えていることであり、彼はいっそう複雑な儀式でもってそれらを寄せ付けないように躍起になっていました。これらの切迫した不安感とは最初、父親の死の一周忌に気づかれました。そしてその3ヵ月後に男性のコンサルタントによって診察され、やがて私のもとで治療開始に至ったわけですが、その時点では問題はどんどんエスカレートしてゆきました。彼の最も困った徴候というのは母親が用意してくれるどんな料理も食べることができないというものであります。毒が盛られているのではないかと恐れたわけなのです。最初のセッションで彼は‘悩み worries’のありたけをぶちまけたわけでしたが、自分でそのように‘悩み’と言っていたわけなのです。それは、空気感染ということもあるし、また母親の手料理からも黴菌がうつるかもしれないとか、それから綺麗な女性が魔女に豹変したり、それから夜中にハムレットの父親の幽霊やらぞら恐ろしい空想が頭に浮かび、

それでベッドの枕元に電気のスウィッチでそれらをコントロールしなければ現実になるかも知れないと真底恐れているといったわけなのでした。この最初のセッションで、私はとりわけなによりも彼の細菌 (germs) やら幽霊への恐れを、彼の亡くなったドイツ人 (German) の父親が四方八方から彼を責めてくるといった恐怖として解釈しました。彼の私に向けられた疑念とは、綺麗な女性 (母親) が魔女となって、そしてその語る言葉 (すなわち食べ物) で彼を毒殺するといったことでもあります。それは母親が父親を毒殺したのではないかと彼が恐れているようにであります。私は、彼が絶えず部屋中を疑り深い目であちこち凝視し、それから私に目を止めるといったことに彼の注意を促します。私は、彼が自分の眼を電灯のスウィッチみたいに使っていて、私をコントロール下に置こうとしていると語ります。彼はそのセッションをとっても考え深い様子で、そしてぐんと穏やかな風情で終わったわけですが、部屋から廊下に出た頃に、私に向かって唐突に、そしていかにも詰問するように、彼を最初に診察した医者はどうかしたのかと問いただしたのであります。

この次のセッションは翌週でありました。彼は最初私に付いてくるのはちょっと渋々といった感じでした。それからプレイルームに入ってから、ひどい夢を見たと言われ語ります。5分から10分ほどの間どうか夢を私に語るまえに、ひどく混乱した話が激流のようにほとばしりました。夢は、鮫が一人の男を食べてしまい、それから彼をも食べようとしているところなのです。それは大きな口を開け、鋭い歯を持っています。しかしウォルターは喚いて大きな音をがなり立て、腕をばたばたと振り回し、それを恐がらせてどうにか追い払ったというわけなのです。 > 私は‘鮫’が私自身であるということを解釈します—最初にクリニックで会ったS医師を私が飲み込んだと彼が恐れたように—母親は一人の男(父親)を飲み込んでしまったと思ったというわけなのであります。そして今や彼は私が彼を飲み込むのではないかと恐れているのです。なぜなら、腕をばたつかせたり、喚いたり、話すことにひどいプレッシャーを覚えるのはどうにか私を寄せ付けまいと必死だからなのです。ここで彼の顔に大きな安堵の表情が浮かびました。彼は、この日クリニックには渋々やって来たということを告白します。母親に私の言うことは退屈だと言ったということです。私は彼のいうところの‘退屈 bored’ というのを文字通り恐怖として捉えました。彼は続けて、長々と物語を語り始めます。或る一人の男が飛行機から落ちてヤブに落下し、それから怪物になったということでした。‘不老不死の霊薬’を盗んだもう一人の男によって殺されたのです。彼はこの後で、もうひとつ別の怪物の物語をします。ここで私は彼の恐怖について解釈してゆきました。すなわち、この怪物とは実際のところ彼自身ではなかろうか、彼のこころの深い奥底に隠れている、紛れもなく彼自身の部分に違いないと私が見破り、そして彼は実際にはむさぼり食う鮫であるとして、彼を死をもって罰するのではないかとひどく彼が恐れたということでありましょう。この解釈で、彼はそのスピリットに光が射してきたかのように表情が明るくなります。彼は驚愕しながらも <ぼく、気持ちが悪くなった。うんと楽だ。ぼくの悩みは消えて行く・・・>、それから熱心に、早口で <だけど他にもあるの。ぼく、あなたにそれを話さなくてはね・・・>と言います。そしてそれらを詳しく聴かせようと話し始めます。

これらの最初のウォルターとのセッションで、転移関係 transference relation は確立されたわけであります。そこでは私は彼の両親のひどく恐ろしい側面を表徴していたわけですから。すなわち魔女で鮫

の母親であり、幽霊のような怪物の父親だったりであります。それらは彼のこころの深層に於いて構成され想像された両親なのであります。彼の貪欲で、万能感的な幼児的側面が投影されており、彼はそれを容易には受け入れられず、また彼のパーソナリティーの中に統合化されずにいたというわけであり、それらは分裂 split-off されて、暴力的なまでに否認されたところの彼自身の側面であるわけであり、彼の外界の現実的な知覚を、そして彼の母親との、および学校でのより健全な関係性をひっくり返すほどに脅かし続けていたのであります。彼の破壊的願望に万能感的に依拠するところがあるのは、勿論のこと彼の父親の死によってそれが強化されたからだともいえます。そして彼は彼の敵対的な思いが実際のところ母親を殺しはしないかとひどく恐れたわけであり、治療において彼がセラピストに会ったとき、それは‘彼のことば’を話すおとなであり、すなわちこうした原始的で気違いじみているともいえる彼自身の部分を真剣に捉えてくれるおとなであったわけ、それで彼は独りぼっちでそれらと共に放置されたままではもはやないことに安堵したといえます。私が彼からのそうした破壊性の投影に耐えることに充分こころ準備があるといったことを示すことで、私は治療場面で彼と一緒にそれらにもっともっと焦点づけを可能にしていったこととなります。私がおとぎ話の中の‘悪い親’となり、怪物的で恐ろしい彼自身の部分の‘受取人 recipient’となるにつれ、彼の家族との関係性はそれで随分と楽になったというわけなのであります。彼は学校へ登校できるようになりましたし、母親の手料理も再び食べられるようになりました。外界はそんなに恐ろしいところではなくなり、彼のそれまでの諸々の多方面にわたる恐怖は減速していったのです。私がもしも彼に、彼は父親を殺してはいないとか、母親は死んだりはいないと言っても無益でしたでしょう。母親はすでにそうしたふうに彼を慰めようと試みることはしていたのですから。彼の健全なこころの部分では、そうしたことは充分承知していたのです。彼は私に語っております。〈ぼく、お母さんの手料理は大丈夫って知ってるんだ。だけどそれがぼくに差し出されるとき、ぼくは皿のなかに毒が盛られているってどうしようもなく思ってしまうんだ〉ということなのです。しかしこの同じ彼自身の部分が、充分にその知覚する能力、そして外界の現実によって修正できるはずの能力を備えながらも、彼自身の投影された万能感および破壊性のぶり返しで脅かされた、混乱しかつ無力な幼児的な側面によって完全にひっくり返されてしまうことがあるわけなのです。

ウォルターの母親は、毎週精神科ソーシャル・ワーカーとの面接を続けておりました。ウォルターへの不安感が緩和された後には、彼女の治療は彼女の夫の死を巡る喪の作業に焦点づけられてゆきました。彼女は彼に献身的な愛情を抱いていたのです。彼女は彼を理想化し、それも彼女自身の元家族からの逃避として依存していたこととなります。喪の作業を経て安堵したことは疑いなく、ウォルターの治療がやがて成功していったことにも大いに貢献したと思われます。そうして母親と息子との間での友好的関係性は築かれていったのであります。

子どもの暴力的に分裂された部分の投影を受け入れるといったセラピストの能力をとおして、彼女は彼をこれらによって生じる不安感を理解し、それでどうにかそれに耐えられるように手助けできたといえます。(或る小さな3歳の女の子が両親に言ったそうです。〈わたし、もうおうちでは全然悪い夢を見たりしないわ。私はそれをMrs. ハリスのとこへもってゆく。あの人私の悪い夢を片付けてくれる



わ>というわけなのです。) これは、子どもの年齢に即した、正常で健康な親への依存性に干渉するものでは決してありません。それどころかそれとはまるで逆に、愛することそして両親から学ぶことといった能力が解き放たれてゆき、そして万能感的で未解決な幼見的投影から波及された否定的な関係性は治療場で十分にケアされるわけなのであります。それでよりいっそう愛することやら信頼できるといった態度が子どものうちに募ってゆき、それにつれて両親側にも自信を募らせ、彼らをよりよい親にしてゆくことが力添えされてもゆくといっていいいでしょう。

### 症例マリオン; 青年期の子どもの両親への投影を中核とする転移状況

さてここで、或る16歳の女子の2年間に亘るセラピイのサマリーから幾つかの側面を提示してみたいと思います。そのセラピイの結果としては、極めて厄介な両親との関係性においてどうか進展が見られたといえます。セラピイ開始の当初、彼女は母親とはさほど全面的に依存しているともいえない関係性があり、つまりは単に母親を自分に都合のいい、理想的な‘ドア・マット’として機能しているといった感じでしか捉えていませんでしたし、また父親とは、それほど独り善がりでも迫害的でもない関係性であったとはいえ、家族の不運にすべての咎があるとして父親を恨んでいたわけなのであります。このケースでは、私はマリオンの治療前に両親との面談をしております。そしてこの2年に亘る治療期間中殆ど彼らと接触を取ることはありませんでした。因みに、両親のどちらもが何年にも亘って不規則ながらもその折々にサイコセラピイを受けておりました。

マリオンは、とても不幸な結婚ともいえるご夫婦の唯一の子供でもあります。彼女の父親は知性もあり、世間体からすればそこそこ成功しているとも言えるのでありますが、仕事に不満を持っておりハッピーとは言えません。彼女の母親は知性的な専業主婦でして、目下彼女はその結婚の失敗を社会的成功者になることで挽回したいと懸命であります。マリオン自身は才能があるにはありますけれど、学校を侮蔑しており、満足な生活とは程遠い状況にあります。そして彼女の学業成績というのは、勉強しなくてもいい幾つかの学科では一貫性はないとしてもそこそこいい成績を収めることが出来ているわけです。彼女は外見的には落ち着き払っており、年齢以上に洗練されているといった印象です。しかしそのころの内側は不確かで、お世辞に弱いといった風がありますし、彼女のことばで言いますと‘まがいもの a fake’なんだということです。両親はよく口論をし、それも彼女を巡ってのことが頻繁なのですが、そうした場合、彼女は母親の味方をします。父親をひどく恐れてもおり、同時に挑発的でもあるといったふうでした。学校との諍いは頻繁に繰り返され、両親もそこに巻き込まれるといったことになりがちです。彼女は教師に不当に扱われているということ、もしくは他の女の子たちからいじめに遭っていると訴えるのであります。彼女の母親が、それから少なくとも一度だけ父親も、彼女の苦情に全面的に同一化し、それで学校当局との間にトラブルを起こしたということがあります。家族の誰か一人がいつも他から迫害されていると感じるといったふうであり、また彼らはしばしば世間を相手に迫害されていると感じるために結束するといったふうでもあり、概してそうしたコンティンされていない家庭状況であった

といえましょう。

私がマリオンと分析的セラピーを開始したとき、家庭内においてかなりの程度のアクティング・アウトが想定されました。つまり私と両親との間にトラブルを惹き起こすといった企てをする何かであり、それは彼女が両親と学校との間に既にしてきたようにであります。それもどうかやがて立ち消えとなり、そして徐々に挑発したり或いは挑発されたりすることのニーズが減じられてゆきました。それも彼女の‘内なる両親’との関係性を分析されることで可能となっていくと言えるのであります。それらは治療場面において表出され、私に転移されるようになっていったからであります。彼女が次第に家族の問題に己自身の投影によって果たしているところの役割に気づいていったこととなります。それが、両親に対して断続的にしろ、より良い評価なり忍耐をも持てるようになり始めていったわけなのであります。母親は理想化されることが少なくなり、父親もまたまったくの‘黒’ともいえないといったふうに…。

私との最初の頃のセッションでは、私が彼女を彼女のいうところの‘見せびらかし屋の小さなマリオン’をあれこれ追究し咎め立てするのではないかといった不安感で彼女はいっぱいでした。厄介な自分の部分、そこから彼女は始終逃げ回っており、けれどもそれは依然として影響を及ぼし続け、行為化し、しかしいつも彼女はそれについて考えるのはいつも明日に引き伸ばすといったふうでありました。彼女は、私が全然Mrs. Oに似ていないというふうに思うのでした。それは彼女の教師の一人で、彼女の大変気に入っている人でありまして、いつも彼女を励ましてくれて、いつも良い点数をくれるのです。しかし本音のところでは、<でもね、自分がどこにいるのやら、もしくは自分が書いたものがほんとにどれほどいいものかなど決して解りっこないのよ>といったふうでした。彼女は言いますのには、私はどっちかという歴史の先生に似ているんだそうです。大學出立てで、生徒たちをハッピーにするというよりもむしろ学科を教えることに熱心だというわけです。<彼女は、私が間違いを犯すと必ず注意するの。そしてきちんと勉強しなさいというわけ。それって全然嬉しくはないけど、でも私はそうすることで結構たくさん学んだということはあるわけなのね>ということでした。

この最初の教師について申しますと、マリオンは母親を見ているのと同じように彼女を見ているみたいでした。親切で許容的でもありますが、真にマリオンの成長を助け、そして彼女の誤ちを指摘してあげて経験から学ぶということを教えるには、尊大かつ支配的でもったいぶった態度の小さなマリオン(すべてを知ってるといわんばかりのふりをしていて、虚栄心がいくらかでも傷つくことに耐えられないといったふうな彼女)に些か同一化し過ぎている嫌いがありましょう。二人目の教師について申しますと、父親の肯定的な像に一脈通じた要素を持っているといえましょう。厳格ですし、それにいかにも全知といった彼女の側面、すなわち万能感的でかつ貪欲、そして真に努力することをせず、その代わりに野心的でやや尊大な空想癖に固執する小さなマリオン、と格闘することを要求しているわけでありました。しかしながら、この教師からは彼女は学ぶことでできると感じているふうであります。一方では父親から学ぶことは出来ないているわけですが…。父親という人は、事実要求がましく、怒りっぽく、尊大に見えなくもありませんが、しかしながら娘については、その才能を活かしそして人生を有意義にするべく成長する

ようにと憂慮しているのですし、彼女の父親との関係性は彼女の過剰な投影同一化によって歪められていたといえなくもないのです (Klein 1946)。彼女自身のまだ自らの内に把握しきれていない‘女性性への侮蔑’を彼に帰しているともいえましょう。父親に、そして男性一般にも彼女はすべての知性及び創造力を帰しているものであり、それが母親との競争のない双生児的な姉妹関係を彼女に持たせるといったことになっているといえましょう。それで母親の生活はマリオンを中心にして動いており、しかしその結果として彼女は身動きならず、そして罪悪感に染まったふうに母親に縛られているといったことになっているわけなのです。

セラピイのセッションの中で、マリオンは絶えず私に対して最初の教師との関係性に似たものを築こうと躍起になりました。つまりは母親というわけですが、それは親切で、慰めともなり、称賛を惜しまないといえ、しかしながら大して理解力もなく、いつも宥めることばかりですから、密かに侮蔑されているといったことになるわけであります。それを維持することが難しくなるとまいりますと、すなわち私が解釈をし、それが彼女にはなかなか啓発的な印象を覚えたときなど、彼女は急速に母親としての私に権威付けを施すことにします。それは元はといえば父親のものであったともいえるわけですが。〈あなたは勿論それをご自分で考えたわけではないんでしょうね。おそらく、それって、あなたの所有する精神分析的な書物のどこから引用されたものじゃありませんの〉といったふうに…。もしくは彼女は、そもそもの彼女自身の虚栄心を私に帰することでそれを台無しにしてしまうことがあります。すなわち、彼女がどんなに大変な人生を送っているのかといったことに共感するよりは、むしろ私は自分の頭のいいことを誇示せんとするうまい解釈を見つけることの方に一所懸命だといったことを言うのであります。もしくは他の場合ですと、彼女は全然私が語っていることを聞いていないことがあります。心がどこか他所へ行ってしまっているわけです。こうした‘こころの不在 absences’を知覚し、それを認識するのにはかなり時間を要したのであります。最初は沈黙が突如始まるということから示唆されました。しかしそれらが認められるようになりますと、われわれはそうしたことが起こる事態に注意を促し、それでうまく舵取りしていくことが出来るようになっていったわけです。

やがてわれわれが知るに至ったのは、こうした‘こころの不在’は、私の何か語ることがらが、羨望といったフィーリングを刺激したり、もしくは彼女自らの羨望的な部分が誰か別の人に投影されるなり、彼女がそれで迫害的な感情を覚えるといったことに少しでも触れますと、それに彼女はひどく脅かされるといったときに起こるということであります。羨望は、この‘早熟で幼いマリヤンの部分’の中でもとりわけ顕著な特徴といえましょう。彼女はそれに直面したり、取り組むことが出来ないのです。絶えず他の誰かにそれを呼び覚ますことによってそれを回避せんとするといった彼女の企ては、従って友達になれる誰彼をも敵に回し、反感を買うこととなりますから、そのため彼女自ら不確実 insecurity によって苦しめられることになるというわけです。彼女とのセラピイにおいて、彼女がどのように私に投影しているかということ、それがために私に、つまりは父親にということですが、彼女は羨望されるやら攻撃されるように感じているといった解釈を彼女に伝えることはそんなに難しいことではありませんでした。もっと難しいことは、私を母親に重ね、それに対しての投影から惹き起こされる歪みといった微妙な特徴について接近を試

みることであります。すなわち、乳房でもあり、そしてプライマリーの慰めの源として、また彼女とは異なるいのちとしての母親であります。もはやそれらは彼女の‘産物’とはいえないわけであります。しかしながらそれぞれの個別性は否認され、それで彼女の‘ドア・マット’として都合よく使われ、‘双生児的姉妹’といったことになっていたわけであります。

母親は事実、こうしたことに片棒を担ぐといったことを実践していたこととなります。マリオンに向かい、夫よりも娘のほうがどれだけ自分にとって大事かといったことすら語っております。実際のエビデンスとしてこうした外界の現実があるだけに、マリオン自身その不和を起こさせるような、侮蔑的な部分を実践されていたり投影することがあるのを認めるのには頑強に抵抗しますし、自分が‘半端な人間’だというフィーリングを回避するためにも、両親の間の調和のとれていない関係性をさらにエスカレートさせねばならないといった思いを認めることにも激しく抵抗することになるわけであります。

彼女がいっそう己の疎外され、かつ損われた側面をその転移において私へと投影同一化することを理解できるようになってゆきますと、彼女は友達の‘良き意見’に全面的に頼り、それで左右されるといったことも減じてまいりました。彼女は‘まがいもの’といった嘘っぽい自分ではなくなってゆき、彼女自身のパーソナリティーを成長させ、そしていつの日にか一人の男性と、単に彼から彼女が貰えるもののためではなく、その人本来の値打ちを受容し、それにまた母親を喜ばすためにでもなく、結婚するといった希望をも抱くようになってまいりました。これらの期待感をよくよく吟味してゆくためには、彼女の中に今や新しく得られた洞察もしばしば分裂しかねませんわけで、そうした傾向をしっかりと捉え直すことが繰り返し必要であり、セラピイの継続が望まれます。しかしながら、彼女は父親ともいくらか和解できてきて、自己正当化して迫害意識を抱くことも少なくなり、母親との間でも理想化が薄らぎ、かつ同性愛的傾向も減じてゆくといったことが事実起きてまいりました。彼女の両親は、殊に母親であります。この点を評価できたといえます。そして時にはそうした評価も彼ら側にとって、断続的に、青年期の夢が花開くことを羨みかつそれを妨げるといったふうな態度を取ることがないとも言えないにしろ、それも必ずしもマリオンのさらなる成長を阻害するほどではありません。

### 症例ジョン; 両親と子ども一緒にのコンサルテーション

ここで私は、おそらくは子どもを定期的な治療に導入することはないと判断される場合、児童サイコセラピストとして両親に対してどのようにより直接的な役割を為すかを少し述べようと思います。それらは、緊急事態にコンサルテーションの依頼を受けた幼児或いは年少の児童が対象となります〔訳註; 【治療的コンサルテーション】(1966)を参照のこと〕。例えば、子どもが急性の睡眠障害もしくは摂食障害を来しているといった場合です。普通はそうした場合、私は両親及び子どものどちらをも一緒に初回のコンサルテーションでお会いすることにしております。そこで私は両親に、そうした困難が具体的にどういうものか、そもそもそれはどのようにして始まったのか、についての説明を出来る限り詳しくお

話いただき、そして彼らなりにどうしてそうした事態が起きたのかの原因について考えるところを率直に語っていただきます。子どもについて話しをしながらも、私はその子どもの行動をインタビューの間観察し、私が見たところのものが両親の説明と一致するかどうかをも吟味します。私は「転移」を使って、深い無意識レベルのことがらを解釈することは敢えて控えます。たとえそれに該当する充分なエビデンス（証拠/evidence）が見出せると考えたとしても…。私がそこでもしお役に立つことがあるとすれば、まずは両親の抱くところの子どもについての不安感を出るだけ自由に表出してもらうことであり、そしてさまざま異なる場面を結びつけ、それで彼らにもそれらを改めて見直すことが出来、そこから彼らの見解がいつそのこと掘げられてゆくよう援助してあげることであります。もし私が子どもの行動に何かしら彼らの注意を促すようなことがあり、それがわれわれの話し合いに幾らかでも解明のヒントが与えられるようでしたら、そうした指摘を私は試みることもありましょう。

さて次に、Mr. & Mrs. Rといわれる若いご夫婦との面談について手短にお話することにいたします。彼らのかかりつけの医者からの紹介で来所されました。主訴は、彼らの下の子どものジョンが、誕生後14ヶ月目ですが、夜中に激しく頭を打ちつけ、そしてぐずり声をあげて親を頻りに呼ぶために、両親はこぞずっと夜中熟睡を妨げられるということが頻りに起きていたからであります。彼らを私のもとで紹介してきた医者が私に警告して言いましたことは、彼らは—特に父親であります—クリニックについて決していい感情を持ってはおらず、それに子どものことを‘気がふれた’のではないかと考えているということでした。そうした状況にはもはや絶望しかなく、そして薬も何の効果も無いというわけで、ついに彼らはクリニックに助言を求めしか手立てがなかったというわけなのです。Mr. Rは静かで、大柄で、知性的な顔立ちの男性であります。彼の妻は、幾つか彼よりも年下でしょうが、魅力的で寡黙な印象です。しかしその落ち着き払った外見の下には抑うつ的で不安げなものが覗われました。ジョンは、父親の大きな額と知性的眼、それから母親の繊細な表情そして距離を置いた沈着さをもった、蒼白い顔をした、きゃしゃな感じの小さな男の子でありました。

両親共に私のジョンへの最初の対応がいかなるものか、かなり緊張して不安げに身構えておりました。恰も私が<あらまあ、この子なのね。最悪というわけですわねえ>と言うのではないかといたった具合に…。しかし徐々にリラックスして、そしてソファの上にジョンを母親の傍らに座らせ、私を与えた車そして犬のぬいぐるみを用いてソファの上で彼を遊ばせます。Mrs. Rは<なぜこんなことがジョンの身に起こるのか、もうさっぱり解らないんです>と語ることから始めました。彼女はいつも彼が家族のなかで一番、それに彼女の知り得る限りのどんなひとよりも、とても性格のいい子と言っていたのですから。赤ちゃんのときには、授乳にはなんら問題はなく、姉のステラに比べればそれほど要求しない感じであったとのことでした。ごく簡単に満足する赤ちゃんというわけであります。それが3,4ヶ月前のこと、夜中に2,3回ぐらい目覚めることがありました。その時彼らは大した面倒になるとも思っていなかったわけで、こうした時期があるとしても一過性のものと思ったのです。ところが事態はぐんぐん悪化してゆく一方なものでした。<彼は目覚めると起き上がり、ベッドに戻ろうとしなくなったのです。そして泣き喚き、誰をもほとほと疲労困憊させたんですの…>とのことでした。

それらの問題が始まった可能性として何かしら理由はないか、そしてさらにはその事前に起きていた何らかの兆候はあったかについての質問に対して、極めて複雑な話が語られました。その殆どをMrs. Rが語ったのですが、時折には夫の方を向き直り、記憶を確かめます。彼女はどちらの子どもの誕生以降もずっとオペアの女の子たち、それに通いの家政婦さんらの手助けを得て育児をしてきたようがあります。それらオペアの女の子が変わったのは2回あり、ジョンが8ヶ月になったときに一度、そして彼が11ヶ月になったときが二度目です。ジョンはそれらどの女の子にもとてもなついておりました。しかし母親は彼の頭を打ちつけるやら眠れないといったことが彼女らのいなくなったことに関連しているとは考えませんでした。なぜならそれは、2番目のスペイン人の女の子が去る一ヶ月前に既に始まっていたからです。そしてジョンは今や彼のナース・メイド、若い英国人の女の子にとってもなついているからです。ステラは、オペアの女の子らが変わる度にとっても動揺するということがありましたけれども、すぐに回復したわけで、ジョンはまるで全然気づきもしていないかのように見えていたわけです。さらにいろいろと問いただす中で明るみになったことは、ジョンが眠れなくなり頭を打ちつけるようになったのは、スペイン人の女の子が滞在していた最後の月であり、この女の子は、日頃子どもたちをとっても熱中して可愛がっていたとのことですが、当時恋愛がうまくいかなかったことがあって、極めてヒステリーな状態であったとのことです。それで両親の見解としては、こうした彼女の心的状態がジョンに残念ながら影響を及ぼしたのではなかろうかということでありました。

私は、このこと以前にジョンは生活の中での変化にどのように反応したかということを探ねます。例えば新しい食べ物であります。するとMrs. Rはこの質問に答えて、<言うのを忘れてましたけど、あの子は食べ物にはひどくうるさいんです。今でも全然慣れるということがありませんの>と語りました。彼は最初から哺乳瓶で授乳されました。彼女のオッパイのお乳が出なかったからであり、どちらの子どもも母乳は与えられなかったわけです。それでもジョンはよく飲み、そしてよく眠りましたし、いつもとてもしっかりした、健やかな赤ちゃんだったとのことでした。ジョンが5,6ヶ月目になった頃、彼らは臨時にもう一人、1週に2回午後だけナーサリー・ナースを雇いました。彼女は、哺乳瓶を止めさせ、ジョンにスプーンとカップで食べさせるように熱心に主張したのであります。母親は、当時、彼女がちょっと焦りすぎではないかと思ったのです。なぜならジョンはスプーンが近づくと口を閉じ、それから抗議しようとしてつい口を開けた途端、その隙に彼女は食べ物を押し込むことをしたからです。しかしながら、このナースにも子どもたちは慣れてゆきましたし、ジョンもすぐに抵抗するのを止め、そして食べ物を受け入れるようになっていったわけです。それでMrs. Rは、これでもう大丈夫と思い、このナースが哺乳瓶を6ヶ月目で止めるよう彼女に説得したことを受け入れたわけでありました。彼は当時哺乳瓶を取り上げられたことを全然気にしていないふうであり、固形食を問題なしに食べておりました。<だけど、勿論今ですと、いつでも彼の好きなときに哺乳瓶をもらえるといったことになっているわけです>と、母親は語ります。私は、こうした状況をステラと比較するとどんなふうですかと尋ねました。<ステラはもっと落ち着きのない子どもなりましたの。そして勿論最初の赤ちゃんは死んでおまして…。彼も男の子でしたの>と言いました。この時点で彼女はひどく抑うつ的となり、そして心ここにあらずといったふうになります。私はそれ以上最初の赤ちゃんのことについては尋ねませんでした。ちょっと待った方がいいと判断したからです。

それはまたこの時点でジョンの方に注意が逸れてしまったということがありました。

この少し前に彼はソファから離れ、父親の膝の上へと這い上がり、それから部屋の中を恐る恐る探索を始めました。最初は折々に父親もしくは母親へとふらふらと引き返して来るのですが、しかし私からは距離を置いておりました。母親と父親はどちらも彼の振る舞いにはずうっと注意を怠らず、彼が転んだりもしくは汚したりしないかと気遣っておりました。Mr. Rは、ジョンが「ちり取り」を私の座っている椅子の下に見つけたとき、それを持ってくるようにと彼に命じます。ジョンはすぐさまそれを父親へと持ってゆきます。それから彼は、私と母親との間にあった「くずかご」へとのろのろと動いてゆきます。その中を覗きこみ、そしてグイと思いつき力任せに自分の方へ引き寄せます。それで瞼の辺りをそれにぶつけてしまいます。そのとき母親は、ちょうど死んだ赤ちゃんの話をしていて、気持ちが宙に浮いたふうだったのですが、すぐさま我に返ってジョンに駆け寄り、彼を慰めます。私はジョンが泣くかと思ったのですが、彼は泣きませんでした。彼は大きな息をし、唇をきつくかみしめ、気持ちの動揺を隠し切れないうような不安げな様子で、2,3秒ほど額を撫でておりました。私は、ジョンが普段傷ついたときそんなに気丈に振舞うものかと尋ねました。するとくそうなんですの。おそらく気丈すぎますわね>と母親が応えます。私は、これは彼がとつてもお気に入りだったオペアの女の子たちとの別れの辛さ pain やら、それに6ヶ月目に哺乳瓶を失ったことについても両親の語ってくれた彼の反応に一脈通じるように思えると示唆します。すなわち、ステラと違い、彼は上唇をしっかり閉じて、辛い気持ちを自分一人で内に抱え込むのがあります。しかしそれが意味するのはどうやら、そうした気持ちが耐え難くなるまで溜め込まれ、やがては夜中に泣き声をあげるとか、頭を打ちつけるといったふうに何らかの暴力的な表出をせざるを得ないことになるわけで、それはまるでいかにも頭のなかに抑えようのない、ひどく厭な経験があるといったふうに彼が感じていることを示しているのではなかろうかということです。

Mrs. Rは、おそらく事実そうしたものであろうと言いました。殊に2, 3週間前のこと、彼は自分に対してとても惨いことをしたわけです。黒く青痣ができるほど額を打ちつけたのですから。そしてこれは彼が欲求不満を覚えるときには大概そうすることが習いだということらしいのです。Mrs. Rは、このことは彼が食べ物にひどくこだわり、文句を募らせていったこととも時期的に一致するということを思い出します。昨日など彼はバナナを3回も部屋の隅へと放り投げることをして、それでやっと食べたのでした。私が、スプーンを使ってジョンは自分で食べますかと尋ねると、Mrs. Rはくええ、でも食べ物を口に入れるよりは、床に落ちてしまうってことがほとんどなのですが・・・>と言います。私はそこで、く彼は数回とにかく拒否することが必要なのかも知れませんが。そして彼が食べ物を摂り込むのには幾らかでも自分でコントロールすることが許されてるといったことを感じる必要がありそうですね。つまりそれはナニーが以前、彼の同意を得ずして、彼の口に食べ物を押し込んだときには否定されていたというわけですが・・・>と語ったのであります。

この一方で、ジョンは再び部屋の中を探索し始めます。「くずかご」に戻ります。それと私とを半分半分にチラチラ眺めています。そこに彼は煙草の吸殻を一本認めました。そしてそれを口のなかへ入れよ

うとする動作をします。それは両親に驚愕を引き起こします。私が手を伸ばして、<ta(ちょうだい)・・>と言いますと、彼はすぐさまそれを私に手渡します。生真面目ふうな、でもちょっとフレンドリーな顔付きです。それから彼はそこからさらに2本の使い捨てのマッチ棒を取り出し、殊勝げに私に手渡します。この後、彼はソファの下を探索し始めます。母親は、彼が汚れるのを恐れて、彼女の座っているカウチの側に戻るようと彼に言いつけます。そこに這い上がったとき、彼は頭をほんの少しバンバンと叩きつける動作をしました。それから背を後ろの壁にもたれて座り直します。その壁に自分のからだを単調に繰り返し打ちつけております。彼が「くずかご」に顔をぶつけたときと同じように何やら強張った表情を浮かべております。

両親は、いかにも絶望しているふうに、<こんなふうなんです。まだいつもよりいい方ですけど・・>と言います。いくらかイラついてきて、私にどうしたらいいんでしょうかと尋ねます。<止めさせようとしても、全然効果はありませんの>と嘆きます。私は応えて申しましたことは、それをしなくても済むようになるためには彼に十分な時間が与えられること、それから、疑いなくさまざまな変化によって引き起こされたはずの不安感が表出され、かつどうにか処理してゆくための機会をも与えられることであり、そして、彼が自分の不安感や怒りをも示すことが出来て、そしてそれが耐えられるものにしてゆけるように援助してあげることが肝心であろうかと思われるといったことでした。例えば、彼は母親が彼にバナナを2回投げるといったことを許され、それでようやくそれが3回目に与えられたときにはそれを受け入れ食べたように。そうすることで彼の気持ちはぐんと落ち着いたわけですし。さらに私が示唆しましたのは、彼が頭を叩きつけること、それに不眠は、おそらく食べ物への猜疑心に関係していると思われまじし、食べることに気持ちが安定してきたらいずれ収まるのではなからうかということでした。彼らの説明からして、また私が彼を観察したところでは、彼は周りの雰囲気に対して明らかにとても敏感のようです。そうした理由から申しますと、母親そして家族の皆にとっても可能な限り負担が少なくなるように、ものごとをごく実際的に対処することが必要にならうといったこととなります。われわれはそれから、食事と睡眠に関してどのような策を講じたらいいのかを話し合いました。Mr. Rはインタビューを終わるにあたって、とても心が軽くなったように感じると言いました。今や事の真相が見えてき始めたわけで、それでなるほどというわけですから、ジョンが単に行儀が悪い子どもでもなく、将来途方もなく困った性格を帯びるといったことにもなりそうにないと期待できるとしたら、大変に安堵だということでありました。われわれが別れる際に、おそらくジョンとMrs. Rに2週間後にまたお越しいただき、お目に掛かりましょうと伝えました。もしもそれよりも早く私にコンタクトを持つ必要があると母親が感じることはない限りは、それで結構かと・・。

彼女はこの2週間後に再び来所しました。この間状況面でかなりの進展がありました。母親も子どもも、どちらもがとても生き生きしてハッピーに見えました。ジョンはインタビューの最初から私との関わりが持てましたし、部屋の探索も制限なしに自由気儘に動き回っておりました。その注意を母親と私と半分半分にしながらも、また何を言っているのか不明ながら何やら頻りに一人でお喋りしておりました(彼は最初のインタビューではほとんど沈黙したままであったのです)。Mrs. Rは<この子は先生のこと



好きみたいですわね。私にもそれが解りますわ！彼はそう簡単に誰にでもなつくことは致しませんの>と嬉しげな調子で私に言います。彼女は、ジョンが与えられた車とか積み木で私と一緒にゲームをして遊ぼうとし始めたことにちょっと当惑します。彼はそれらを蹴飛ばしたり、私に押し付けるやら、床の上にバンバンと叩きつけたりします。しかしながら、彼女は、私がそれには全然気にも留めていないのを見てとり、ジョンがこうしたゲームに至極満足げである様子が覗われ、それを止めるように彼を諫めることはせずにやらせておりました。その一方で私に話し続けます。

私は、こうしてMrs. Rそしてジョンにさらに2回、2週間後とその後3週間後にも会ったわけですが、このインタビューで、周りの雰囲気には彼が極めて鋭敏であることを観察するさらなる機会を得たと思われる。3回目のセッションで、Mrs. Rが最初の赤ちゃんがなぜ死んだのかという話をしておりましたときのことです。その赤ちゃんは臍の緒が首に巻き付いていたということですが、ジョンもまた同様に危うく窒息死を免れたのであったということでした。ジョンは、そのとき私と一緒に遊んでいたのですが、明らかに母親の声音に悲哀感を感じたもののようで、そして彼女の語る言葉の意味をも幾つか了解したのでしょう。彼は突然私から離れて、ソファーへと寄りかかり、母親の方に歩みを進め、そして自分の腕を彼女の首の辺りに廻し、それから絞殺されるかのような動揺した泣き声を低く漏らしたのであります。計4回のインタビューで彼が泣いたのはこのとき一回きりでありました。彼は毎回私と一緒に遊ぶことを続けました。(積み木を積み上げたり、倒したり)嬉々として、かつ幾らか遊びに変化を付けながらも…。彼は、私が明らかに、彼と母親のどちらもが一緒にいて安心して不安感を示すことが出来、かつ理解してもらえるのを期待できそうな人として感じとっていたようであります。4回目のインタビューで、Mrs. Rはジョンが夜ぐっすり眠るようになっていし、よく食べるし、頭をバンバン叩きつけることもほとんど止んだように思われると報告しました。彼女はこの回ではこれまでとは違ったふうに彼について語っております。彼女が日頃見知っていたはずの極めて性格のいい子というよりも、むしろものごとに対して断固とした態度をとり、どちらかというところ苛烈な気質の備わった、魅力的な小さな男の子といった感じであります。育てるにはちょっと厄介かも知れませんが、でもそうだとすると、彼女としては興味を持ち対応してゆくでしょうし、自信がなくもないといったふうに覗かれたのであります。

こうした両親及び子どもと一緒にのコンサルテーションにおける私の役割は、たぶん究極のところサイコセラピストのそれと大して違いはないものといえましょう。つまりのところ、すでにお話いたしましたように、子どもがやがて精神分析的サイコセラピーに導入されてゆくといった場合の子どもの両親との面談と比較してみるとということになります。それはすなわち、共感的な観察者(a sympathetic observer)、治療的な人(a therapeutic person)としての役割を担うことでもあります。それは、両親ならびに子どもによって提示される場所の問題のあらゆる側面を考慮することができるということであり、そのように訓練されているということでもあります。そして問題をさまざまな側面から振り返り、そこで両親自らがその理解力と直感の語るところのことから従うように、つまりは子どもと一緒に暮らしているといった掛け替えのない経験を彼らが十分に活用し得るように、援助してあげられることなのであります。私はこうしたインタビューで幾つか助言をすることがあります。しかし私としてはいつもそうすることにはとても慎重なので

すし、そしてためらいがちに語ることにしております。なるべく権威筋からの宣託を聞かされるといったことではなく、むしろ両親にとってすでに馴染みのある何らかの洞察やら了解がいつそう強化されることになればと思われます。

尚、これから子どもの治療が開始されるといった場合には、その子の両親とは初回のインタビューでお会いするわけですが。それ以降、子どもの治療経過中の両親とのインタビューにおいては、このような同じ技法を援用します。そうした場合、子どもが同席されることはありませんけれども・・。

### 家庭内での子どもの発達の観察

ここで、ごく普通の家庭といった状況で赤ちゃんの発達を1年間に亘って週ごとに観察に携わるといった際の観察者がその興味なり感受性ゆえに果たすであろう‘治療的な役割’といったことについて考えてみたいと思います。私は、そうした観察について研修生及び同僚たちから報告されるのに耳を傾けながら、そうしたことを深く悟らせられることが実にしばしばあったからであります。そのような週ごとの観察、またそれに伴うセミナーでのディスカッションは、【タヴィストック・クリニック】で児童サイコセラピスト養成のために13年ほど前に開始されたのです。そして現在では、このクリニックでのすべてのコースにおいて研修生のトレーニングの一部になっております(Bick, 1964)。こうした実践の眼目は治療的なものではありません。われわれは‘普通の’家庭に学ぶために招かれ、母親と赤ちゃんそして他にもしも家族がいればそれらメンバーとの間の相互の関係性を詳細に観察するわけであります。そしてこうした関係性がどんなふうに進んでゆくのか、それを出来る限り明瞭にそのイメージを捉えてゆくことをいたします。そうした組織だった観察は、経験をした多くの人にとって実に啓示的ともいえるものであります。私が繰り返しソーシャル・ワーカーなどからよく聞かされたことなのですが、母子関係性が赤ちゃん側からの貢献 contribution にどれほど左右されるかということ、もしくは新生児を抱えた母親がどの程深刻なストレス下にあるのかといったことなど、それが最初の赤ちゃんでももしくは他に世話をしなくてはならない上の子どもたちがいたとしてもですが、それらはまさに経験して初めて知り得るというわけであります。そうした折に、両親の彼ら自らの両親との関係性、それが外的にしる内的にしる、極めてはっきりと浮き彫りにされてゆくということがあります。例えば、もし父親のそれ自らの母親との関係性が良いものである場合、彼は妻に対してもその母親としての役割にとっても大きなサポートとなるでしょうし、もし彼女が混乱を来していない人であるとしたら、そうした母親であることに彼女が自信と成熟を見出すことを援助できるに違いありません。このようなサポートはまた、‘共感的な観察者’によっても与えられることが出来るといえましよう。すなわち、家族のメンバーのどの人にもでも興味を抱き、そして彼らが協働しながら共に育ててゆける彼らなりの方法を模索してゆくことに大いに関心が向けられることでしょう。

私自身、或る家庭で最初に生まれたこどもの観察をしたことがありました。(※訳註; E.Bick【乳幼児観察への覚え書き】(1964)P.4; 赤ちゃんKを参照のこと)。母親は妊娠期間中(因みにその妊娠は計画

されていたわけではありません)、絶えず下痢を起こし、健康がすぐれませんでした。赤ちゃんが誕生する頃には、彼女は不安げながらも、まるでリボンやら他のいろいろな装飾品を身につけた、どこかお店で彼女と夫が買ってでも来るみたいに、‘人形さん’の赤ちゃんをもらう小さな女の子のように期待を弾ませておりました。赤ちゃんの分娩はとても迅速で難なく生まれました。とても大きな、元気でよくお腹をすかせる男の子でした。両親ともにすっかり誇らしい様子でした。母親は母乳を与えたいと意識的には思っていたのですが、でも赤ちゃんとも母親のいずれにも不安があって、それはすぐに終わらねばなりません。彼が7週目になったとき、完全に哺乳瓶のみで授乳されております。母乳を与えるように彼女を励ますことは大して役には立たなかったでしょう。彼女はあまりにも深く自分のからだから漏れ出す液体の性質に不確かだったから、プレッシャーを掛けるのはむしろ彼女の罪悪感を募らせるだけでありましたでしょう。この母親は赤ちゃんを大事に思っていたのは間違いなく、出来る限りのことをしたのであります。しかしどうにか彼がむずかっていることにも我慢し、そして宥めるといった反応ができるようになるための真実の母性愛が育まれていくまでには何ヶ月も掛かったのです。最初の数ヶ月間、彼女はただ機械的に育児に専念しておりました。そして一見して何も感じてはいないふうでした。子どもがカナキリ声を張りあげて泣き喚き、からだを突っ張らせて首を思い切り反らしていたとしても、ただひたすら彼女は細心の注意を払って衣服を着せたり、入浴させたり、もしくは他にどんなことをしていたとしても、それに没頭しているのみだったのです。後に状況がよくなったとき、彼女は私にこんなことを語ってくれました。学校時代に友達が結婚し赤ちゃんを持つことを話していたとき、彼女はく私もいずれはまあ結婚するかもしれないわね。だけど絶対赤ちゃんなんてとんでもないわ。死なせちゃうに決まってるもの・・・>と内心思ったんだそうです。やがて彼女の赤ちゃんを愛しそして愉しむことにおいて徐々にそして大層な進歩が見られたのは、おそらくは子育てに自信が付いてきたことと、そして彼女の夫からのサポートがあったからでありましょう。彼は、彼女が子どもの世話をするのに一番適した人であるということに何ら疑いを抱いておりませんでしたし、この点において彼女を援助することができるあらゆることをする心の用意があったわけなのです。

そうした観察をし、そしてそれにいろいろと考察を加えてゆくなかで得られた経験は、私が治療する子どもたちの両親に対応するときの私の態度及び技法に大いに影響したものと思われま。つまりは、セラピー場面以外の子どもの暮らしに於いてその扱いに責任を持つことには自ずと控え目になるといったこととなります。そしてやがて、児童サイコセラピストとして、私が患者の両親に対してできる最大のことは、親であることの彼らの能力を精いっぱい機能させることであり、そのように援助することなのだと思えるように導かれていったといえるのであります。(訳出; 2016/01/25)

\*\*\*\*\*  
※原典; The child psychotherapist and the patient's family  
by Marth Harris  
Journal of Child Psychotherapy (1968), Vol.2(2), pp.50-63.  
\*\*\*\*\*